御伽噺

私達は一口に「お話」と云つてしまふが、其の御話と云ふ中には、神話、傳說、歷史譚、寓話、童話と云ふ樣なものがある。其の內の童話と云ふのが、私達の研究して見たいと思つた所謂御伽噺なのである。

何處の國にでも、其國に語り傳へられてゐる神話もあれば、又山や川や動植物にちなんだ傳說のあるものである。これが物語となつて云ひ傳へられるのである。例へば、ずつと昔南ヨーロッパの伊太利の方では、靴直し（日本の下駄の齒入れと云つた樣なもの）が、旅から旅へと所々を歩きまわつて、さて晩になるととまる宿屋もないので、普通の民家にとまつて、そして其處であちらの村で一つ、その向ふの里で一つと云ふ風にあちらこちらで聞いて來た話を、如何にも面白く話して聞かせた、その內に、次第次第に大勢の人が濁つて來て、其の靴直しの話を興味深く聞いたものである。これがそも〳〵お話と云ふものゝ始である。又北歐のスカンヂナビア半島地方では、子供をねかしつける時に、母親や乳母は、其國の神話や傳說などを色々と面白く話してきかせた。又「冬ものがたり」Winter tales と云つて、怖い話や、勇ましい話を、吹雪や雪に外へ出ることが出來ないで內に籠つて居る人々が、爐邊で老人から聞くのもある。かう云ふ風にして、諸國に神話や傳說が時代を經て云ひ傳へられてゐることは、どこの國でも同じことである。しかし、これを學問的に研究すると云ふことは、決してなかつたのであるが、十八世紀の終から十九世紀の始にかけて、獨乙に於て盛にロマンチックムーブメントが起つて、當時の社會に牛耳を取つて居たのは、詩人や、哲學者や、宗敎家の團體であつた。これ等の人達は、クラシック、スコラスチック、ラシッナル等の典型を破壞して、たゞ祖國の感情に基く自由豁達で、且つ深遠な感興を重んずる樣になつて、哲學者には、フイヒテとかセーリングとか云ふ樣な人が現れ、言語學者、文學者には、グリムやボップなど云ふ人があつて、しきりに此の意義を鼓吹し、且研究を進めて行

つた。其の內で、殊にグリムは此の主義から東亞の傳說や、童話や、又は、中世頃から獨乙の山野のあちらこちらにある傳說をあさりあつめて、其れの歷史的研究を試みた。これが今日の「お伽噺」研究の興味を惹き起した力であつて、我が國でも、德川時代に二三の學者があることはあつたが、盛になつたのは明治廿七八年頃からで、國民的精神の勃興と共に起つて來て、高山樗牛、姉崎嘲風兩博士の神話研究が先づ第一に現れた。それに次で、高木文學士の神話傳說研究が始まり、それからかう云ふものゝ研究が俄に盛になつて、終に文藝調査會の童話傳說調査になつたが、特に小波氏を中心として、始めてお伽噺の翻譯、創作、口演が開かれたことは、まことに興味のあることだと思ふ。

それで只今我が國のお伽噺と云ふと、（一）純粹に我が國固有の神話なり民間傳說なりから源を發して居るものと、（二）支那、朝鮮、アイヌ、南洋、印度、西洋などのお伽噺から思想や組立をとつたものや、（三）それ等をとりまぜて翻案をし直したものや、さう云ふ三種のものがある。例へば、神話なり傳說なりから系統を引いたものは、古事記や、万萬集や、風土記などに書かれたお話がある。桃太郎の話も或る學說によると、古事記にある「桃の手柄」と云ふ神話が形をかへたのであると云ふことである。此の「桃の手柄」といふ神話を極引くるめて簡單に云つて見ると、次の樣なことである。伊弉冉命は迦具土と云ふ火の神をお生みになつて、遂におかくれ遊ばした。そして女神は地の下の黃泉國に往つてお在になる。其れを慕うて男神の伊弉諾命は黃泉國に往つて、女神に逢つて「今一度歸つてくれ」と御賴になつた。けれども女神は「もう黃泉國の食物を食べた後だから、明るい世界へは歸りたくも歸られませぬ。しかし遠方をわざ〳〵お迎にお出でになつたのですから、何とか歸り樣はないものか黃泉の神樣と相談して見ませう。私が奧に行つて居る間決して覗いては可けませぬ。」と堅く云ひ置いて、女神は奧へお入りになつた。男神は長い間まつてお出になつたけれども、なか〳〵女神が出てお出にならないので、餘りの待ち遠しさに、先刻言はれたことを忘れて自分の頭に挿してお出でになつた、櫛の大齒を一本欠い

て、それに灯をともして、眞暗い御殿の奥深く忍び入つて女神をお捜しになる。男神は奥へ奥へと進まれてとう〳〵女神を捜し出されたのはよかつたが、驚いた事には、女神は眼もあてられないやうなあさましい姿になつておいでになつた。其の上に、恐ろしい八つの雷が、大きな目玉を光らして、大きな口を開いて、女神の体の方にくつついてぶつ〳〵と火焔を吐いて居る。女神の恐ろしいお姿を見て、男神はあわてゝお逃げ出しになつた。女神は「折角あれ程堅く言つて置いたのに、淺ましい私の姿を見て恥をお掻せになつたのは恨めしい。」とおつしやつて、黄泉醜女と云ふ女鬼に云ひつけて、男神をおひかけさせられる。男神は一生懸命に走られたが、醜女に追ひつかれさうになつたので、髪飾の蔓を取つてお投げになると、それが一房の葡萄となつた。意地の汚い醜女は、直に之を摘んで食る。男神は又追ひ付かれさうになつたので、櫛の齒を缺いてお投げになると、此度は筍になつた。醜女が、又、これを取つて食べて居る内に、男神は大分遠くお逃げになつたが、筍がなくなると醜女は又追かけて來る。かう云ふ風にして、男神は一生懸命に逃げようとなすつたが、女神は更に彼の八つの雷に追かけさせられた。男神は足の續く限り走りつゞけて、とう〳〵黄泉國と此の世との境の、黄泉平坂と云ふ所までた逃げ延になつた。ところが此の坂の麓に大きな桃の木が一本あつて、美しい實が澤山なつて居た。桃と云ふものは鬼が恐れるものである。そこで、伊弉諾命は、其の桃の實を三つ摘つて、桃の木の蔭にかくれてかみなりや鬼共が追ひ近づくのを待ち受け、ばら〳〵と、桃の實をお投げつけになると、皆一縮になつて逃げ返つた。命は大層お喜になつて、其の桃の木に大神實の命と云ふ佳い名を下さつた。まあこんな風なものであるが、それが室町時代あたりから、今日話す様な桃太郎の話になつたので、朝鮮征伐をした秀吉などは、小供の時にうと〳〵しながら、よく桃太郎の話に眠つたものだらうと想像してゐる學者もある。又「かち〳〵山」の話も、此の一の例に入るものであつて、これは古事記にある因幡の白兎の話が、或山國へ行つた時に、其の國の山と、山家の一軒家とを背景とした時に、あゝ云ふものに變つたの

である。次に第二の例を云つて見ると、平安朝、鎌倉時代頃から、支那傳説、印度傳説の影響の多い事は今昔物語などでよく分る。たとへば、字治拾遺の中の「雀報恩の事」といふのは、「舌切雀」の前身であるらしく、「浦島太郎」の話は、今昔物語には「買レ龜放男依ニ地藏助一得レ活語」と云ふので出て居る。又筋は違ふが、字治拾遺にも書かれて居る。其外室町時代に入ると、「お伽草紙」が現れたが、其の中には「鉢かづき」、「物臭太郎」、「御曹司島渡り」などと云ふ色々の簡單な話がおさめられてあるが、皆この範圍に屬するものである。更に西洋のもので我國に最も歡迎せられたものは、「イソップ物語」や「グリム」「アンダーセン」「アラビアンナイト」「ロビンソンクルーソー」等である。これらのものが入る様になつてからは、更にこれへ作者の思想を加へて、第三のものに屬する多くの話が生れた。これらを比較して見ると、純日本の系統を引いたものは、どうしたものか多くの場合消極的に話が進んで居る。「舌切雀」の例で云つて見ると、爺さんが雀を折角可愛がつて育てゝ居たのに、糊を食べたからと云つて婆さんに舌を切つて逃がされてしまつた。爺さんは可愛い雀に逢ひに山へ行つて、さて歸る時にも、お土産として出されたつゝらも、小さい方をもつて歸る。と云つた様な具合である。ところが純外國のものになると、全く積極的で生々して、活動的のものが多い。この點は西洋物の非常によろしい所である。けれども一つこまる事には、多くの場合一人の主人公が花々しく無邪氣に活動して居ると、大ていの場合それに配すべき美しい金髪のプリンス又はプリンセスが現れて來る。そして多くの活動や冒險の結果は、二人の結婚で目出度し〳〵で終つて居ることである。無論日本のお話にでも、お姫様をお嫁にもらうと云ふ様なのが無いでもないが、それは偶然の結果として現れて來たもので、西洋のものゝ様に、始から其の目的で書いたものではない様である。西洋のものは、たしかに奇麗である。お伽噺を、文學的と教訓的に別るならば、その前者に屬するものと云ひたい。今日でも、多く外國のものを譯して居るが、此の欠點をのぞいて、もつと無邪氣なものとして子供に與へなくてはならないと思ふ。

お伽噺は其性質から大別すると、自ら

(A) 興味を中心とするもの

1. 内容に興味を求めるもの

2. 形式に興味を求めるもの

(B) 教訓を中心とするもの

になる。内容に興味を求める話にも色々あるが、話の筋が面白く入り組んで居る爲に興味を起させるものが先づ多い。桃太郎の話は其の一例で、桃の流れて來る事件、割ると赤坊が飛び出すこと、鬼征伐に出ること、日本一の黍團子で家臣を得ること、鬼ヶ島での戰況、勇ましい凱旋等子供に取つては、應接に遑がない程面白い事件が後から〳〵と出て來るのである。その事件の復雜と、場面の變化とに興味を起されるのである。形式に興味を求めるもの即ち形式に面白味のあるものは、桃太郎の黍團子に於ける、出て來る者毎に對して「一つは遣られん半分遣らう」と云ふ樣な反復が第一で、次で連續した事件がいくつとなく出て來る連續形式、又類似した事件が幾個となく堆積して行くが或所迄行くと一つの事が辨じられた爲に、急に話の筋が逆行する堆積形式、即例を擧げて云へば

或時小鳥が籔にとまつて、籔に一搖搖れて呉れと頼むと籔が應じない。そこで怒つて山羊の處に行つて、「山羊よ籔が搖れぬから籔を咬んで呉れ」と頼んだ。山羊は應じない。そこで狼の處へ行つて、「狼よ山羊を食つて呉れ、山羊は籔を咬まぬ、そして籔は搖れぬ、と云つた。しかし狼も應じないので、狩人の許に行つて、「狩人よ、狼を殺して呉れ、狼は山羊を食はぬ、山羊は籔を咬まぬ、籔は搖れぬ」。……

かう云ふ風に、小鳥の請求が一一堆積して行く、此の先にまだ火、水といくらでも續くが、これが或所迄行くと、或者が小鳥の請求を入れる。さうすると直に進行の方向が逆になつて、出發點に歸つて行く。即ち狩人が狼を殺さうとすると、狼は山羊を食ひかける、山羊は籔を咬みかける、籔は搖れる、と云ふ風になつて　小鳥の請求はかなふと云ふのである。又循環形式などのものであるが、この循環形式と云ふのは、一點から發して話の筋が次第に進行して行くが、知らぬ内に話は出發點に出て來ること

で、例へば次の話は其の好例である。

或時金持の鼠が居て、自分の娘の小鼠を、世界一の偉い人の許にお嫁にやらうと思つた。それで、太陽の許を訪れて、「貴郎が世界一のお偉い方だと思ふから、何卒娘を嫁にもらつて下さい。」と頼むと、「いや、乃公よりも雲が偉い、乃公が下界を照り付けようとしても、雲に遮られるとどうすることも出來ぬ、雲の所へ相談に行くが好い。」との返事であつた。そこで鼠は娘をつれて、雲の所へ行つて來意を告げると、「それは風君の方が偉いよ、乃公が空を濶歩しようとしても、風が吹くと意氣地もなく方々吹き散らされる、たしかに風君の方が偉いよ」と云ふ。それで今度は風の所に行つて頼むと、「乃公も壁にはかなはぬ、どんなに威勢よく吹きつけても、壁の奴は平氣で居る。」との返答、しかたがないので、今度は壁の嫁にしようとすると、「さすがの乃公も鼠には叶はぬ、夜々横腹に大穴をあけられるには閉口だ。」とこぼした。そこで鼠は遂に娘を仲間の嫁にやつたと云ふこ

とである。

次に教訓に重きを置くものには、主に單獨形式のものと、對立形式のものとある。前者は、中心人物は一人で、其の人の行爲と、其の行爲の結果のみを主眼として、教訓を説くもので、浦島の如きはそれである。浦島太郎と云ふ一人者が、小供になぶられる龜を見て、可愛相がつてこれを買つて海に放つてやると、その報で人の見ることの出來ぬ龍宮を見て來た、と云ふのである。後者は二人の主人公を持つて居て、其の二人の行爲と、其の結果とを對照して示して、教訓を説くものであつて、「舌切雀」、「瘤取り」、「花咲爺」、などはこれに屬するものである。

大体かう云ふ風に分つて、更にその價値を考へて見ると、中には優秀なものもあるが、庸劣にして取るに足らない話もある。それ故、私達は庸劣にして取るに足らない樣なものは捨てゝ、優秀な物語を採らねばならぬ。さて此の優秀であるか、庸劣であるかを識別するには、何等かの標準がなくてはならぬが、其の標準を定める爲には、先づお話の眞の使命を顧みる必要があるのである。お話の眞の使命には

色々あらうが、大体まとめて見ると次の様になる。

1. 兒童に高尚な愉快を與ふること、
2. 兒童の德性を涵養すること、
3. 兒童の趣味性を啓發すること、
4. 智識を豊富にすること、

等であると思ふが、其の中でも、「好いお話」は何よりも先づ第一に、兒童をして興味と觀喜とを以つてお話に傾聽させるものでなくてはならぬ。如何に有益な話でも、子供にとつて興味のちつともない者であつたら、子供はお話と云ふものはいやなものだとして、これを聞くことに大きな苦痛を感じるであらう。かうして、聞く事を厭ふ樣だと、そのお話の含む教育的價値を十分に發揮することは出來ない。それならば、どう云ふお話を子供が喜ぶか、と云ふに内容からは、活動性、情緒の働き、空想的要素、繪畫的印象等を備へたもの、形式上の條件から云ふと、變化性反覆性を有する種類のものである。其の例證として、私は次のものを選んで見た。勿論これでは、内容の方面から、又形式の方面からの凡ての要素を含むだものとは云へないが、一つで之等の凡てを含むだものと云ふのは、一寸むづかしい。これは比較的よろしいかと思ふ。

鴨取り權兵衛

昔々備後の或る所に、權兵衛と云ふ男が住んで居た。池に降りて來る鴨を取るのを渡世にして居たので、皆が鴨取權兵衛と呼んで居た。或時權兵衛は、一日に百羽の鴨を取て見たいと云ふ大層慾張つた考を起した。そこで、近所の池の傍に大きな網をかけて、自分は近くの籔の中に隱れて、鴨の降りるのを待ち構へて居た。すると、やがて大きな羽音がして澤山な鴨が舞ひ降りた。そして、次ぎ〳〵に網にかゝつて遂に九十九羽迄かゝつた。「占めたぞ、もう一匹で百羽になるぞ。」と權兵衛は籔の中でほく〳〵して居ると、網にかゝつた九十九羽の鴨が、一時にぱつと飛び立つて、網を被つた儘空にまひ上つた。逃がしては大變だと、權兵衛は忙てゝ籔の中からとび出して、網からだらりと下つて居た網にすがり付いた。すると見る〳〵空中に引き上げられて、池も籔も小さく見える樣になつ

た。落ちたら命が無いと思つて、一生懸命に網を握つて居ると、どうしたはづみかぶつつりと網が切れた。「しまつた」と權兵衛は覺えず叫んだ。けれどもどうしたせいか、糸の切れた凧の樣に體がぶら〳〵と搖れて緩に落ちて行く。此の分なら命に別條はないと思つて居ると、やがて見知らぬ土地に落ちついた。きよろ〳〵と四邊を見廻したが、何處へ來たのやら薩張り解らない。そこで道行く人を呼び留めて、「此處は何處です」と尋ねると、其の男は不審らしい顔をして、「阿波の國ぢやねいか」と云つて立ち去つた。大變な所に來たものだと吃驚したが仕方がないので、或百姓家に奉公して、耕作の手傳をする事になつた。一日畑に出て重く實つて居る粟の穗を切り放したはづみに莖が刎ねて、權兵衛の體を彈いた。すると權兵衛は其の力で、空中高く彈き飛ばされた。目が眩む樣な氣がして首を縮めてじつとして居る内に、どしんと音がして大層繁華な大通りのまん中に墜ちた。暫く身動きもせずに居ると、大勢の者がどや〳〵と寄つて來たので、忙てゝ近くの傘屋にかけ込んで「此處は何と云ふ町です」と聞くと、「大阪ですよ」と云つて胡亂さうな目付をして居る。權兵衛は重ね〳〵の不幸に悲しくなつて精しくわけを話すと、傘屋の主人も氣の毒に思つて、店に使つてくれる事になつた。或日、權兵衛が廣場に傘を乾して居ると、俄に強い風が吹いて來て、其れを吹きとばした。はつと思つて傘の柄に取り縋ると、傘は風のまに〳〵空に吹き上げられて、何處ともなく流れて行く内に、今度は京の三十三間堂の棟の上に落ちた。權兵衛は恐ろしいのを我慢して下を見ると、境内を往來する人が豆の樣に見えて、眼がぐら〳〵する。こんなに高くてはとび下りることも出來ぬ。さて困つたものだと、暫くは思案に暮れて居たが、やがて喉が裂ける樣な聲で、「おーい助けてくれ」と呼んだ。參詣の人達は、思ひ懸ない屋根の上から、幽かな人聲がするので吃驚して見上げると、何やら人らしい者が三十三間堂の棟の上にちらついて居る。何したのかと思つて居

ると、「おーい助けてくれ人間だ人間だ」と云ふ聲が聞える。そこで色々相談した揚句、京都中の蒲團を借りて來て、三十三間堂の軒下に積み重ねた。そして、下から、「おーい此の上にとび下りろよ」と叫んだ。權兵衛は思ひ切つてとび降りた。けれども餘り高い所から飛んだので、蒲團の上に落ちた柏子に眼から火が出て、其の火が燃え移つた。そして權兵衛は、瞬く暇に黑焦になつて燒け死んだと云ふことである。先づこんなのであらうかと思ふ。

今日のお伽噺の中での欠點と云ふと、餘り教育的にしようと云ふ大人の考から、教訓的、教訓的と云ふ事に計り重きを置き過ぎて、お伽噺でなければもつて居ない無邪氣なうるほひは何處へやらほうむつてしまつて、全然寓言を連ねた樣なものになつてしまつたものが多い事である。又惡い話は、獨り言や對話の分子のみ多くて、動作の分子に乏しいもの、殊に「だます」と云ふ行爲を寫したものは、純潔な子供の心に少なからず葛藤を起さして、非常に惡い結果を得る事がある。

お伽噺を取り扱ふ上からも、子供には子供の心の世界のある事を忘れてはならない。ところが、作者は兒童ではない。作者の思想感情と、兒童の思想感情との間には、自ら大きな差がある。現代の未開民族、太古の吾々の祖先の代ならば、大人でも今日の兒童の樣な「心の世界」に住み得たであらうが、現代の文明國の大人の世界は、兒童の世界とはすつかり違つて居る。從つて其の大人の作つたお話は、どんなに苦心しても、野蠻人や、古代人の生んだお話が持つて居るやうな、兒童の世界を再現する事が乏しい。それでは吾々はお話の新作を斷念しなければならぬかと云ふに、さうではない、相當の準備さへすれば、或程度迄は成功し得るものである。其の相當の準備と云ふのは、

1. 眞に子供を愛して、出來るだけ子供の思想、感情に肉迫して、其の微細な點迄も周到愼密に觀察し研究すること。
2. 古來の優秀なお話を反復熟讀して、自ら其の妙境に入ること。

かうして我々は先づ兒童の世界を了解し、愛して、

始めて彼等に最もふさはしいお話を生むことが出來るのである。お話の中で好んで不道德な事件を誘導することは、勿論喜ぶべき事ではないが、それだからと云つて、どんな方法にも必ず教訓的意味を含ませねばならぬと主張するのは誤である。兒童に觀喜を當へ、趣味を高めるお話なら、道德的意味をもつて居なくても結構である。一体兒童と云ふものは、無道德時代から、漸次に道德意識が發達して來るのであるから、お話を兒童に授くる場合にも、無道德なお話から始めて、次第に道德的色彩を含む話に進めて行くのが正當な經路である。道德と云ふことに餘り拘泥し過ぎて、未だ道德意識の發達しない子供に、小むづかしい教訓的お話を授くるのは、彼等の美しい想像の世界をぶつ壞して、お話に對する感興をさまず計りである。お話の世界は、殆ど歷史、實話、自然界の話を除くと、常に空想の世界である。そして、此等のお話の興味の大半は、其の內容が科學を超越し、科學の束縛から自由であると云ふ點にある。兒童の心を自由に想像の世界に走らせるがよい。桃の中から人間が生れるのは、科學的思想に反して居るとか、文福茶釜に毛が生へるのは、科學的思想に矛盾して居るとか云ふ樣なこと計り六ヶ敷論じ立てるのは、子供の心の世界を少しも知らぬ人の云ふことだと思ふ。

我國には從來お伽噺と云ふものが餘りに輕く見られて居た。前にも云つた樣に、組織的の研究が起つたのは最近の事であるから、それから後と云つても、其の進步はまことに微々たるものであつた。そして「子供つぽい」とか、「偉さうに見えない」とか云ふ考のもとに全く輕視されて居た。實際大人にとつて餘まりに飽氣なく、又他愛ないものである。故に從つて興味も少いが、子供は無邪氣の權化であつて、あどけない愛と、笑とに充ちて居るので、其の「子供つぽい」、「偉さうにない」ものでなくては、子供の心に共鳴はしない。今假りに子供の世界からお伽噺を取り去つたならば、誠に暖味のない沙漠の樣なものになつてしまふだらう。お話は子供の心の糧である。そして知らず〳〵の內に、子供に深い大きい喜を與へ、教訓をし、文學的趣味を養つて行く。

大政治家でも、大宗教家でも、大教育家でも大學者

でも、「昔々」などと云ふお伽噺を聞きながら、うと〳〵眠つた經驗のない人はなからう。其の間に、色々とたくましくした理想を成長せしむる萠芽となつたのかも知れない。又母の膝の上で乳房をいぢり乍ら聞かされた「お天子樣には忠義をつくさねばならぬ」事や、「花咲爺の犬はお爺さんからよく可愛がられた平生の恩を思つて、黃金のありかを敎へた」事や、「慾張り爺さんはどう〳〵牢屋につながれた」事やが三つ子の魂百迄で、よい加減背丈延てから理屈でこね上げた道德思想よりも、どんなに有力に人間を支配するかも知れないと思ふ。それにもかゝはらず、今日の有樣を見ると、お伽噺を研究して居る人と云つては、少年少女雜誌の記者か、さもなければ二三の專門家であつて、肝心の敎育者の位置に立つて居る者は、まるで他人の事の樣に考へて居る。今後は、他の領分だと云ふ樣な考をもたないで、專門家と步調を揃へて、學校の敎師も、家庭の父母も、愼重な態度でお伽噺を研究して、家庭へも、學校へも、どん〳〵取り込んで、子供にうるほひのある興味を絕え間なく與へたいものである。近來歐洲では、修身科の敎材に、お伽噺を用ふることが盛になつて來たさうであるが、好結果の得られることは云ふ迄もない事だと思ふ。我國に於ても、德目に配合していや味のない、美しい興味あるお伽噺を作つて敎材に用ゐる樣な日が、一日も早く來てほしいと思ふ。（文一ノ四　田中、長手、植田、野田、久保）

叙事詩としての平家物語

平家物語は、日本文學中誠に立派な作品の一であつて、只今の流布本六卷を通讀して一つのまとまつた叙事詩と見る事には何人も異論はないやうである。たとへば、一曲の音樂の如く、しかもそれは、起筆第一にある祇園精舍の鐘の音の、幽かに空氣を動かしつゝ、流れゆくやうに悲哀の調に涙ぐむばかりの情調を動かす所が、平家物語の基調 Maintone であるやうに思ふ。しかしもし音樂にたとふるとしたら、一音調にも、高低・大小・强弱の音色の變化があるやうに、平家物語の與ふる音律にも、起伏波調などがある事も、また直ぐ氣づく事である。故に、平家物語全篇を一つの叙事詩として見れば、恰も耳の練れた人が、音樂を樂しむ時の心で、其微妙變化の跡を尋ねて、熟讀して味つて見やうと思ふ心から、其開展の有樣を尋ねて見たいと思ふ心が起つて來る。

此考は何人もある事と見えて、只今まで此の問題に觸れたのは二通りある、

1. 山田氏
   a. 清盛を中心とせる前卷（卷五の終りまで）
   b. 義仲を中心とせる中卷（卷六より卷十二まで）
   c. 義經を中心とせる後卷（卷八より卷十二まで）
2. 內海氏
   a. 清盛を中心とせる前卷
   b. 平家沒落を中心とせる後卷

とされた、私どもは直接には此の見方の判斷を目的とせぬ、唯全篇を讀み了つて、何んとなく其の文書批評的の乾涸と、印象批評的の茫漠とに、輕い反感を禁じ得ないのである。此の感じをお話しする爲に、まづ平家物語の大体を通觀した我等の平家物語を映現せしめねばならぬ。

忠盛時代の平氏は、武人として大層卑しめられ、彼が內の昇殿を許された時など、公卿殿上人は心よく思はないで散々彼を恥しめやうとたばかつた位であつた。

所が清盛時代になつてからは、保元の亂、平治の亂と云ふ、大波が、平氏を乘せて、一躍最高所にまで運んだのである。丁度忠盛に於て、幽かに起つた音は次第に振動を大にして來て、今や漸く佳境